现代日语副词习得研究

现代日本語副詞の習得研究

杨红◎著

西南交通大学出版社

現代日本語副詞の習得研究

现代日语副词习得研究

杨 红 著

西南交通大学出版社
·成 都·

图书在版编目（CIP）数据
现代日语副词习得研究 / 杨红著. —成都：西南交通大学出版社，2017.7
ISBN 978-7-5643-5570-8
Ⅰ. ①现… Ⅱ. ①杨… Ⅲ. ①日语－副词－自学参考资料 Ⅳ. ①H364.2
中国版本图书馆 CIP 数据核字（2017）第 164782 号

Xiandai Riyu Fuci Xide Yanjiu
现代日语副词习得研究

杨　红 / 著

责任编辑 / 祁素玲
特邀编辑 / 童　荷
封面设计 / 严春艳

西南交通大学出版社出版发行
（四川省成都市二环路北一段 111 号西南交通大学创新大厦 21 楼　610031）
发行部电话：028-87600564
网址：http://www.xnjdcbs.com
印刷：四川煤田地质制图印刷厂

成品尺寸　170 mm × 230 mm
印张　15.75　　字数　305 千
版次　2017 年 7 月第 1 版　　印次　2017 年 7 月第 1 次

书号　ISBN 978-7-5643-5570-8
定价　68.00 元

图书如有印装质量问题　本社负责退换
版权所有　盗版必究　举报电话：028-87600562

序

日语副词因其种类繁多，用法不一，颇难研究，而习得研究则更难：因副词使用原本不多，遣词造句既可用之，亦可不用，且诸多学习者对副词持回避态度，收集相关例证较难；加之可供参考之学术著作并不多见，所有这些，均为撰写《现代日语副词习得研究》博士论文增加了不少困难。

然而，杨红老师知难而进，从第二语言习得理论出发，利用600余份不同年份的全国大学日语专业八级考试作文答卷自行制作语料库，对日语专业四年级学生的作文从质和量两个方面进行彻底研究，发现学习者的副词使用有严重的词汇高原现象和偏误的僵化现象：到了高年级阶段，副词习得存在母语负迁移等问题。究其原因，学习者对副词的概念、内涵及词形等认识不清，易与汉语副词产生混淆。

该研究还通过问卷调查，从另一侧面验证了对作文语料库研究所发现问题提出的独特见解。

杨红老师 2011 年考入广东外语外贸大学攻读日语语言文学专业博士学位，是我的关门弟子。入学后，她主攻日语习得研究，充分利用我校丰富的日语文献资源，如饥似渴地研读前人研究成果，经四年余寒窗苦读、潜心钻研，完成了这一对日语习得和教学具有重要参考价值的拓展性研究。

值此博士论文出版之际，杨红老师嘱我作序，有感于她研究日语的不倦精神和认真态度，欣然命笔，是为序。

杨诎人

丁酉年二月初九

写于广州白云山麓广外寓所

目 録

第 1 章　序　論……1
1.1　研究の目的と意義……1
1.2　第二言語習得研究と本研究の位置づけ……2
1.3　研究方法……10
第 2 章　先行研究……12
2.1　日本語学における日本語副詞研究……12
2.2　日本語副詞の習得に関する先行研究……21
2.3　先行研究のまとめと残る課題……29
第 3 章　「大学日本語専攻生八級能力試験」の作文について……32
3.1　調査の目的……32
3.2　本研究における副詞の定義……32
3.3　抽出した副詞の分類……36
3.4　調査の対象と方法……41
第 4 章　作文調査の結果分析……43
4.1　副詞語彙の正用の特徴……43
4.2　副詞語彙の誤用の特徴……72
4.3　考　察……106
4.4　残る課題……111
第 5 章　語形における安定化現象についての調査……113
5.1　調査の目的……113
5.2　調査対象……114
5.3　調査方法……114

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

5.4　調査内容 …… 114
5.5　分析方法 …… 116
5.6　調査結果 …… 116
5.7　調査結果のまとめ …… 133
5.8　結果の考察 …… 134

第 6 章　副詞語彙の高原現象についての調査 …… 140
6.1　調査の目的 …… 140
6.2　調査の対象 …… 141
6.3　調査の方法 …… 142
6.4　擬声語・擬態語の抽出 …… 143
6.5　分析方法 …… 148
6.6　調査結果 …… 150
6.7　分析結果のまとめ …… 196
6.8　考　察 …… 198

第 7 章　結　論 …… 206
7.1　本研究の成果 …… 206
7.2　今後の課題 …… 208

注 …… 209
付録 A　作文の中の副詞一覧表 …… 212
付録 B　中度使用層の単語と低度使用層の単語 …… 217
付録 C　クラスター分析の結果 …… 223
付録 D　アンケート 1 …… 225
付録 E　アンケート 2 …… 228
参考文献 …… 230
后　记 …… 245

第1章　序　論

1.1　研究の目的と意義

「外国語教育の目的がその言語の運用能力の育成にあるとするならば、その学習者がどのようにその言語を使用しているかを調べることは外国語教育の出発点であり、到達点でもあろう」という考えはネウストプニーだけでなく、世界中の多くの外国語教育の実践者や研究者が共有するところである（ネウストプニー1995：186）。

Ellis（2003）は第二言語習得研究の二つの重要な目標として、記述と説明をあげている。記述は学習者の能力について明確な記述を行い、学習者の第二言語知識の発達や調整の規則性を発見することを目標とする。一方、説明とは、インプットからL2の知識がどう発達し、その知識がコミュニケーションにどう用いられているか、また、学習者個人の多様性は何によって引き起こされるかを明らかにすることとしている。

現在のところ、国内外において、日本語語彙研究はある程度進められているが、日本語語彙習得研究はスタートしたばかりである。特に日本語副詞についての習得研究の数がまだ少ない。さらに、多くの研究は記述研究に止まっていて、研究対象も初級あるいは中級学習者の習得困難な語に限っている場合が多い（王2006、遠藤2008、洪2012）。もちろん、それは日本語の副詞が複雑であるため、それの習得を記述・説明・考察するのが容易なことではないからであろう。

もともと、副詞は他の語彙に比べ使用頻度が低く、また使用されていても偏りがあるように感じられる。中国人学習者の場合、発話や作文において、「とても」「たいへん」などの使用頻度が高く誤用も少ないことが観察される。しかし、正解率が高い「必ず」「もっと」などにも、共起する述語が間違ったり、意味に少々ずれが生じて不自然

に感じられる誤用が見られた。確かに、他の品詞に比べ副詞の用法を間違えてもコミュニケーションに大きな支障が生じることは、少ないように思われる。また、副詞は使用を回避していても、伝えたいことは伝えられる場合が多い。しかし、副詞がないと、話し手や書き手の微妙な感情や様子を適切に表現することはできない。森田（1988）で指摘されているように、副詞は、作用や状況を説明する働きというだけでも抽象度が高くて理解しにくいものであるが、その上、それを使う話者の心理を微妙に反映している語が多く、使用に当たっての難しさを増している。日本人ならごく当たり前な心理的前提をもとにした副詞の使い方——その文脈の底を流れる場面や状況・話者の心理などが織り成すある特有の条件を踏まえて成り立つ副詞の発想——が外国人にはじゅうぶんに理解できてないからなのである。

つまり、副詞という品詞の語彙は語や文に付属する語彙でありながら、理解・習得が難しい語彙である。しかし、現在のところ、高学年学習者における日本語の副詞の習得実態についての詳細な記述も具体的な考察も欠けているのが現状である。そして、低学年学習者の副詞習得特徴との相違はあるか、学習者は副詞の習得段階にいて、どのような発達特徴があるかも未解決の問題として残っている。

そこで、本研究は作文コーパスやアンケート調査を利用した実証研究を行い、高学年日本語学習者の副詞知識の広さと深さを追究することにより、中国人日本語学習者の副詞発達段階の特徴を突き出す。このように高学年日本語学習者の副詞の習得状況を探ることにより、より効果的な副詞の指導方法の開発につながるのではないかと考える。

1.2　第二言語習得研究と本研究の位置づけ

1.2.1　中間言語

20 世紀 70 年代に入ると、言語習得研究の流れは学習者の誤用を収集し、その誤りの種類と原因を実証的に究明しようとする「誤用分析」

(error analysis) へと移っていた。Corder (1967) は、言語学習の研究にとって学習者の誤りが非常に重要で、誤りを分析することで学習者の第二言語の学習ストラテジーを予測できると主張した。誤用分析では、誤用は目標言語を十分に習得していない学習者が起こす体系的な逸脱であり、学習者の顕在的言語能力を反映しているとされる。ここでは、学習者は単にインプットを取り入れるだけの受動的な存在でなく、インプットの処理、仮説の構築と検証、更新を行う能動的な行為者と見なされた。

しかし、使用回避などの問題を解決するために、誤用だけではなく正用もあわせて観察し、学習者の言語全体を研究の対象として扱う必要がある。Selinker(1972:35)は、学習者が言語習得過程において示す、母語とも目標言語とも異なった独自の規則を有した連続した言語体系を「中間言語」(Interlanguage: IL) と名づけた。70 年代半ばになると、誤用をその一部に含む学習者言語の総体を対象に、さまざまな観点からその実態と発達過程を解明しようとする「中間言語分析」(Interlanguage analysis) が行われるようになり、より包括的な「第二言語習得研究」(Second Language Acquisition:SLA) という呼び方が一般に用いられるようになってきた。

今日、第二言語習得過程に見られる中間言語の一般的特徴として、体系性、浸透性、遷移性、普遍性、変異性、化石化などが挙げられている (山岡 1997 : 75－76) 。迫田 (2002) はこれまでに示された中間言語の特徴を次のようにまとめている。

ア　中間言語には体系がある。

イ　中間言語は、新しい形式や規則を容易に適用し、修正され、発達していく。

ウ　中間言語は同一個人の学習者の同じ時期に、異なった形式が存在する。

エ　中間言語の発達過程において、化石化 (ある項目が誤用のまま改善されないで残る現象) が見られる。

このうち、化石化 (fossilization) は Selinker(1972)の当初から

指摘されていた中間言語の特徴であり、学習者言語の一部が不完全なまま発達を止めてしまう現象をさす。現在では、この用語の代わりにStabilization（安定化）という用語を用いているようである。しかし、安定化は化石化とは連続体の関係にある違うものである（Han1998、Han&Selinker1999）。安定化は一時の発達停止の状態であり、まだ改善される（Vigil＆Oller、1976）、化石化は「いかに多く説明や教授を受けたとしても改善されることがあまりなく、比較的永続的な誤りとして残る特徴を持つ」（山岡 1997：68）。しかし、安定化が化石化になる可能性があるので、有効的な学習方法や教育方法を通して、防がなければならない。そこで、安定化の起因と改善の方法に関する研究を重視するべきである（文 2010：115）。

高学年日本語学習者の使用実態を調査するに当たって、避けられないことは用法の安定化という現象である。Han（2003）の分類により、第二言語習得における安定化の実証研究の方法のうち、典型的誤用のアプローチ（typical-error approach）、高学年学習者のアプローチ（advanced-learner approach）などがある。本研究の取る方法はまさにその二つである。

なぜその二つのアプローチをとるかというと、高学年学習者の中間言語は比較的に目的語に近く、目的語と違う言葉の使用は安定化の対象となりかねないからである。もうひとつは、母語背景が同じである学習者の作文コーパスを利用して、犯した典型的な誤用について研究・分析するという方法は学習者の個人差異を説明しがたいが、一つの団体の学習者の中間言語の一般的特徴をはっきり反映することができるからでもある。

ほかに、Linnarud(1986)は英語母語話者と英語学習者の作文を分析した結果、母語話者と学習者の常用の品詞類からみると、形容詞と副詞の使用において大きな異なりがあるという。Leslie&April(2000)の研究はTOEFLの作文を対象にしている。それによれば、学習者の言語レベルが上がるにしたがって、作文の長さも増えてきたと同時に、接続詞や語気を強調する単語なども増えてきたという。

1.2.2 語彙の習得研究

外国語の語彙を学んでも何らかの原因でそれらを適切に運用できないのであれば語彙学習への意欲は薄れる。このため、語彙の習得には学習者の学習時点での記憶能力を含む認知能力に過度の負荷がかからないようなタスク練習が必要になる（Nation1994：ｖ）。語彙指導の目的と重要性について、Nation（1994：viii）は、

"Vocabulary learning is not an end in itself. A rich vocabulary makes the skills of listening, speaking, reading and writing easier to perform. Learners' growth in vocabulary must be accompanied by opportunities to become fluent with that vocabulary. This fluency can be partly achieved through activities that lead to the establishment and enrichment of vocabulary knowledge, but the essential element in developing fluency lies in the opportunity for meaningful use of vocabulary in tasks with a low cognitive load."

と述べ、語彙知識が４技能の"fluency"や運用能力と密接に結びついていることを指摘している。以下では、このようなことを念頭に、「語彙を知る」とは具体的にどのようなことなのか、その構成要素を次に考えてみたい。語彙の学習目的は、一般的に言えば、単語認識力（語彙の質と数量）を高め、文化的背景知識を深め、これ等を運用能力に反映させることにある。基本的には、"lemma"（意味、統語、品詞）と"lexeme"（形態、発音、正書法）に関する情報を理解し運用できることにあると言えよう（Jiang 2000：48）①が、この外にも、語彙の適切な使用域（register）やコロケーション特性（collocational properties）また定型表現（formulaic expression）等の知識が加わる。

Laufer（1998）は、学習者が母語話者と顕著に異なり、また学習者の習熟度が最も反映されるのは、ライティングやスピーキングで使用される語彙の豊かさにおいてであると述べている。戴（1998）は語彙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

習得の重要性を強調し、語彙がなければ文法規則も成り立たないと指摘している。語彙知識には「単語を何語知っているか」という語彙知識の「広さ」、つまり量的な側面と「１つの単語についてどのくらいよく知っているか」という「深さ」、つまり質的な側面がある。それに、語彙理解の深さというのは、派生形、関連語、語と語のつながり（コロケーション）などを意味している。それに、語彙の発達は量の問題だけではなく、語彙知識の深さもとても重要である（Laufer 1998）。また、第二言語の語彙習得を研究する前に、単語の内部構造を見る必要がある（張 2011）。

Levelt(1989)の単語の内部構造モデル理論では、語彙項目(lexical entry)は意味的・文法的情報をもったレーマ(lemma)と形態的・音韻的情報を持ったレクシーム(lexeme)からなっているというように述べられている(図 1-1)。

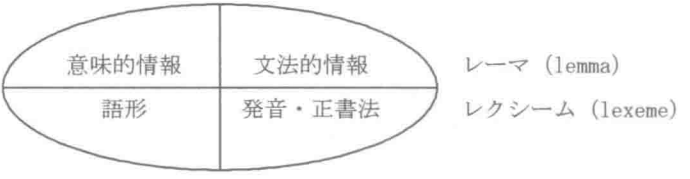

図 1-1　Levelt（1989）の語彙項目（Lexicon）の内部構造

ほかに、戚（1985）でも、語彙には形式の面（レクシーム）と内容の面（レーマ）という二つの方面があるという。例えば（図 1-2）、

図 1-2　戚（1985）の語彙項目（Lexicon）の内部構造

また、単語の意味には付加の意味や、修辞の意味、文体の意味なども含まれているという。

これらの理論はほとんど屈折語の英語の語彙についての考え方であるが、Levelt(1989)の語彙内部構造理論のほうがよりよくまとまっている。具体的に、発音・正書法（phonological and orthographic）、語形（morphology）、意味的情報（semantics）、文法的情報（syntax）という四つの部分に分けているが、ここで注目してほしいのは、語形（morphology）という部分における語彙の特徴である。Morphology はもともと形態論、語形論で、印欧語根や接尾辞などのものを指す。例えば、[leg-]という語根は「集めること」を意味しているが、更に派生して話すことを表す。重要な派生語は、語幹(lect)を持つ語(select、collect など）、接尾辞（-logy）を持つ語（biology、 technology など）がある。例えば（図 1-3）、

Finally
- 発音：/'faɪnəli/、正書法：finally（○）― finelly（×）
- 語形：final+ly（形容詞＋接尾辞[-ly]）
- 意味：最後に、やっと
- 文法：副詞で、通例文頭、動詞の前で使い、順番や時間を修飾・制限する

図 1-3　「finally」の内部構造

このように、一つの語を四つの情報に分けられる。

近年では、L2 の心的語彙について、その情報内容である“lexeme”（形式、綴り、発音、形態素）と“lemma”（意味、統語）の習得順序と発達過程を明示したもの“Psychological Model of EL Vocabulary Acquisition”（心理学的 EL 語彙習得モデル）があり、語彙習得に関連した諸項目が詳細に論じられている（Jiang 2000:47-77）。

Jiang（2000）は Levelt の単語の内部構造モデルに基づき、第二言語の語彙習得過程を三つの過程に分けた。第一段階は形態の段階(formal stage)である。この段階では、第二言語の語彙を学ぶ際に学習者は母語の概念・意味体系に頼りがちになるという。第二言語のデータを処理するために、そのデータを第一言語の概念・意味体系に結びつけて、単語の意味特徴、統語規則、語形の特徴などは殆ど注意されていない。このような注意の現象は人間の心理認知過程の省力原則

で説明できる(陳 2008)。第二段階は、母語語彙の仲介段階(L1 lemmamediation stage)で、この段階では、目標言語の単語と母語の対訳の単語との関係が一層強化され、語彙の意味、品詞、統語規則などの知識も同時に注意される。しかし、この段階の特徴の一つは、目標言語の単語と目標言語の概念とのつながりが弱いということである。その原因は、目標言語の単語の意味はやはり母語との翻訳から得たものである。しかし、学習者は次第に自分でその単語に係わる統語や共起制約の規則を構築していく。ただ、そのような語彙知識はまだ不健全で、不安定であり、母語の転移の影響がやはり残っている(董 2009)。語彙習得の第三段階は、L2 の整合段階(L2 integration stage)である。この段階では、単語の意味と目標言語の概念と直接関係づけられ、第二言語習得の最終目標と理想状態であると言えるが、その段階に達せる学習者が極めて少ない(董 2009)。以上の三段階を図 1-4 で示す。

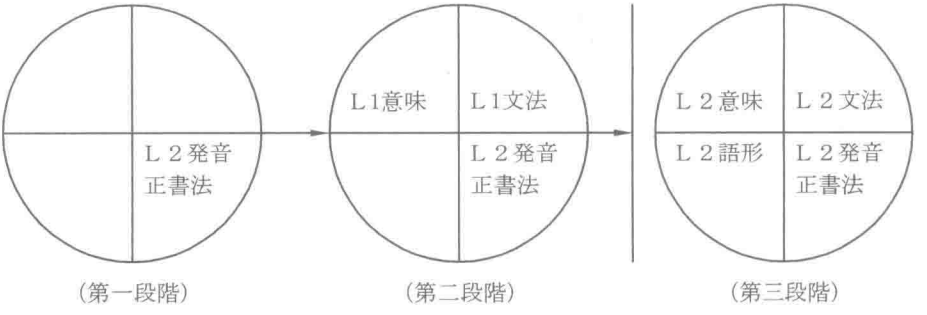

図 1-4　Jiang (2000) 語彙の発達段階モデル

このモデルの図を見てみると、何が一番最後に習得されるかというと、Ｌ２意味、Ｌ２文法、さらにＬ２語形という三つのものである。そして、意外なことに、Ｌ２語形のように、一見簡単そうに見えるものが実は習得しにくい。

上述した二つの理論に基づき、粘着語である日本語にも当てはまるかを具体的な例で試してみる。まず、日本語の副詞の内部構造を見てみる(図 1-5、図 1-6)。

一気に
- 発音：[ikkini]、正書法：一気に（○）――　一气に（×）
- 語形：「一気＋に」（名詞＋に）
- 意味：休まず一息に、一挙に
- 文法：副詞で、動詞の前で使い、動詞の状態を修飾・制限する

図 1-5　「一気に」の内部構造

やっと
- 発音：[yatto]、正書法：やっと（○）――　やと（×）
- 語形：やっと＋0
- 意味：時間や手間をかけて何とか実現・成立するという気持ち、ぎりぎりで余裕がないという気持ち
- 文法：副詞で、文頭に使い、話し手主体の気持ちを表す

図 1-6　「やっと」の内部構造

つまり、日本語の副詞には、形態的特徴を持つものと形態的特徴がないものがある。しかし、Jiang の主張した語彙の発達段階モデルによれば、語形の習得は最終段階、理想段階である第三段階になってから、実現できるということであるから、副詞の語形も相当習得しにくいはずである。が、周知のように、品詞論からいえば、独立語であるが、用言と違い、日本語の副詞には語尾変化がないということが重要な特徴である。もし、そうであるなら、この語彙発達段階モデルに通用しなくなる。しかし、「一気に」、「一斉に」、「実に」、「直に」、「特に」と「単に」の間に、それに、「さっさと」と「黙々と」、「始めて」と「改めて」の間にも形態的特徴が見られた。それで、日本語の副詞発達段階にも上記のような三段階のような特徴が見られるか。この問題に対して、現段階では、初級、中級段階における副詞の習得研究が一定の研究成果が収まったが、高学年の学習者の習得段階の特徴は、まだはっきりされていない。

そこで、本研究は中国人高学年の日本語学習者を対象とし、日本語副詞の習得の実態を調査・分析するのが主な目的であるが、大きく言えば、一種の語彙習得研究とも言える。それに、中国人高学年の日本語学習者の副詞の習得も副詞発達段階の途中に位置するに違いないが、初級・中級を対象とした先行研究を参考にしながら、副詞の発達段階モデルを考察していく。

1.3 研究方法

副詞語彙の広さと深さの調査については、データベースを利用して調査できるが、副詞の語彙知識についてどのぐらい習得しているのかを追究するには、データベースやコーパスだけでは解明できない。そのため、本研究は第二言語習得過程に見られる学習者言語の多様性と体系性、それらに関与する多元的な要因を認め、Levelt(1989)単語の内部構造モデル理論と Jiang (2000) の語彙習得過程理論に基づき、高学年学習者の正用の特徴と典型的な誤用の傾向をまとめる一方、理解面及び運用面の双方より、多角的、実証的に考察してゆく。具体的には、中国人日本語学習者の数多くの作文を利用して、以下のような複数の調査、課題を組み合わせた方法を用いる。

まず、作文コーパスを利用し、データを収集・統計分析をする。具体的には、山内 (2004) が提唱した、「学習者による産出された作文などの中から語を拾い出していく」という方法を用いて、研究を進めていく。なお、本研究では、このようなアプローチを「学習者コーパスアプローチ」と称する。分析の際、「比較可能な状況において同じ言語の非母語話者と母語話者がそれぞれどのように振舞うかを比較対照する」という方法を用いる。そして、それと同時に、中日両言語の副詞の相違を比較研究しながら、副詞の誤用に関与する諸要因を、発達過程による違い、後ろにくる被修飾語との関係も含めて質的に検討し、その中から、副詞の広さと深さの実態を探る。

次に調査結果から浮き彫りにされた問題の原因を検討するために、仮説を立て、検証する。そこで、副詞の語形に関する知識を調べるために、語尾連想テストを行い、副詞語彙の高原現象 (lexical acquisition plateau) [②]について調べるため、擬声語・擬態語の共起動詞連想テストを行う。調査の結果は運用レベルと理解レベルとの観点から、質的及び量的に分析し、誤用の原因を多角的に検討する。

本研究は、高学年日本語学習者の副詞習得における習得の実態とそのメカニズムを明らかにするにはどうすればいいのか、その方法論を模索するものである。どうやって副詞の習得を促すか、どうやって、安定化になりやすいものを防ぐかを、みなと一緒に考えてゆけたらと考える。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com